

早稲田大学総長 殿

2008年4月1日

所属 文学学術院

資格 准教授

氏名 御子柴 善之

特別研究期間研究成果報告書

1. 研究課題： 現代ドイツ応用倫理学におけるカント哲学の受容と変容
2. 研究期間： 2007年4月1日 ～ 2008年3月31日
3. 研究場所： ドイツ連邦共和国、ボン
生命諸科学における倫理のためのドイツ情報センター

4. 研究成果概要

今回の特別研究期間は、2007年4月から8月までの前期と、9月から2008年3月までの後期に大きく二つに分けることができる。後期にボンにある早稲田大学ヨーロッパセンター所長代行を引き受けることになり、日々の生活の一部を（ときには大部分を）その運営のために費やしたからである。もちろん、後期においても研究を怠ったわけではなく、むしろ前期で行った研究を発表原稿にまとめて、実際に発表するなどの成果を得た。

まず、今回の特別研究期間における私の研究課題「現代ドイツ応用倫理学におけるカント哲学の受容と変容」について、その結論をまとめておく。英語圏で成立し世界の倫理学者を巻き込んで展開している応用倫理学的問題に対応するために、ドイツの哲学者は日本人が想像する以上に強くカント哲学に依存している。ただし、その際、カント哲学のもつ形而上学的所説、たとえば、人間に感性的性格と叡知的性格の区別を導入するような所説はほとんど顧みられることなく、むしろ現象的世界における自由と不自由の区別、目的と手段の峻別が議論の中心に据えられている。ここにカント哲学の現代的受容におけるその変容を見て取ることができるであろう。

さて、前期の研究活動は、連日、研究場所である「生命諸科学における倫理のためのドイツ情報センター」に通って、その資料を検討することに費やされた。その成果は、この3月に文学研究科紀要に発表した論文「連帯という問題——社会倫理の一原理——」にまとめた。その内容を略述するなら、現代ドイツの多くの哲学者が多様な社会問題に対応するために「連帯」概念を検討しているが、そこでは「相互性」が重要な要素として機能している。しかし、連帯の重要性を認めつつも、その相互性を過剰に重視することは当該概念の矮小化を招く。そこで、カント晩年の著作『たんなる理性の限界内の宗教』（初版1793年）の第三篇の所説を参照することで、「相互性」を背景に退かせつつ、かつカントの説く「他人に対する不完全義務」を「連帯」義務に読み替えつつ、現代の国際社会問題に応用可能な連帯概念を構想した。

前期で特記すべきこととして、さらに次の二つを挙げることができる。第一に、ボン大学の授業を受講するなかで、現代における「人格」概念研究の第一人者、D・シュトゥルマ教授が、カント哲学研究における上記のような転換を明確に提示したことである。第二に、5月にヴッパータール大学で開催された学会「カントの道徳的当為の構想——〈自由の理念〉から〈理性の事実〉へ——」に参加することで、ドイツにおけるカント哲学研究

の趨勢を見聞できたことである。

次に、後期の研究活動であるが、それを二回の研究発表によって代表させることができるだろう。一回目は、11月にボンで開催された独日倫理学コロキウムにおける発表である。同コロキウムは「グローバル化時代における倫理学」という表題の下に開催され、私は、“Der Begriff der Solidarität als einer ethischen Aufgabe”（倫理的課題としての連帯概念）というテーマで発表した。その内容は、上記の論文を一部援用しつつ、高齢化社会という日本とドイツに共通する問題から、グローバル化した世界における国際援助の問題まで、その対策を企図するにあたって、どのような連帯概念が適合的であるかを論じたものである。二回目は、1月にフランクフルト大学で開催された独日カントコロキウムにおける発表である。私は“Faktum und Dialektik der reinen praktischen Vernunft — Das Innigste der Grundhaltung des Gutseinwollens -”（純粹実践理性の事実と弁証論 — 善くあろうという根本態度の最内奥）と題して発表した。その内容は、「善くあろうという根本態度」という視点を設定することで、カントの『実践理性批判』の中で最も不分明とされた所説（純粹理性の事実）と最も弱いとされた所説（純粹実践理性の弁証論）を共にその重要性を明らかにしつつ統一的に解釈できるというものである。この二回の研究発表はその内容の多くを前期の研究に負うものである。

なお、後期には研究上もうひとつ大きな出来事があった。それは10月にグライフスヴァルトで5日間に渡って開催された国際学会「カントとヨーロッパ啓蒙の未来」に参加したことである。この学会における多様な研究発表を聴き、現代ドイツにおけるカント研究の方法論に二つの方向を認めることができた。すなわち、歴史的方法と総合的方法である。

早稲田大学ヨーロッパセンターの所長代行を引き受けたことで、後期の研究時間は制限されたが、それでも一年を通して実り多い特別研究期間を過ごせたと自負している。